

日中文化交流の伝播と影響

—徳川初期の独立禪師を中心に—

徐 興 慶*

一、はじめに

1、問題の提起

近世日中文化交流のプロセスにおいて、杭州出身の独立禪師（戴曼公、性易、1596-1672、以下「独立」と称す）は徳川初期に日本（長崎）へ渡航した。彼は儒教、仏教の学問を共に重んじ、古典書籍を通読している。その学風は経論、諸子詩賦などの経典を校閲した西漢の経学者劉向に肩を並べる知識人であると賞賛されている。しかし、日本における独立の事跡は、あまり知られていない。日本では、岩国藩の儒者宇都宮遯庵（1633-1709）は「独立は博識見分を広め、儒書を広く涉獵、仏乗を出入し、書法を能くし、医術を知ると共に詩賦を最も堪能なり。」¹という。なお、中国の清末に「中体西用」の学説を唱える知識人王韜（1828-1897）は、彼の日本訪問と関わる『扶桑游記』に、次のように記している。

明が滅ぼされた後、日本へ赴く者は凡そ三人なり。水戸では則ち朱舜水なり、尾張では則ち陳元賛なり、紀伊では、則ち戴曼公（と独立）なり……皆勝国から亡命の臣なり。²

また、独立の才能について、「戴曼公、僧名は独立。書画を良くし、書画の譜に載せる。戴曼公は東海に入り、歸らず」と記して、独立が絵画の方面でも相応の巧者であったことを認めている。

2、先行研究

日本の学界においては、今関天彭の『近代支那の学芸』³の中に、独立禪師伝の殊に中国における事情を論及したのが、その始めであろう。次に、辻善之助の『日支文化の交流』には独立禪師の帰化のことを提起した。⁴また、桂芳樹は『独立略伝』（1939）、『独立と広嘉』（1948）を著し、これらの内容は、のちに同氏の「長崎に渡来した独立禪師の岩国における資料」としてまとめた。⁵このほか、吉永雪堂編『天間老人独立易公紀年』（1961）、石村喜英の「黄檗独立禪師交遊の一側面」（1969）、など、独立の研究に参考できる基礎文献がある。

1970年代に入って、石村喜英の「戴曼公独立禪師の偉績」の最も詳細な研究が現れた。⁶また、独立と吉川広嘉の交友関係については、桂芳樹の「僧獨立と吉川広嘉」⁷の中において、独立の岩国における医術及び詩作などの日中文化交流の内容に触れている。そして2000年になってから、高井恭子の「書道思想における道家思想の一端について—王羲之から黄檗僧獨立性易まで—」、⁸「黄檗僧獨立性易の経史批判の特色—唐朝における正史整備事業と仏教の関係—」、⁹「獨立性易の書と学問—明書風受容の背景」、¹⁰「明末歸化中国僧の学識について」、¹¹など、独立の学芸及びその思想主張についての一連の研究が注目される。特に高井恭子の「獨立性易の六義解釈について—王羲之批判を論點として—」においては、若き頃の独立は道教を中心とし、同時に易经や天文学を研究し、中年以降は出家して仏学を習ったという。そのため、独立は学芸を修行する順番は道教＝仏教

*台湾大学教授

＝儒教となっている。独立は自分の著作『書論』では三教共通の問題に触れたり、孫のために書いた『有樵別緒自剝分宗記』（1672）の中でも道教、仏教、儒教の三教を言及し、それぞれ語っている「性」、「文」、「理」などの用語は異なるが、三教の宇宙に向ける目標は同じであると指摘している。¹²

管見によれば、台湾では、早く独立の研究を携わったのが梁容若の「明季兩戴笠事蹟考」であろう。¹³梁氏は、中国では戴笠と名乗る文化人は二人いるため、日中の学界では、ややもすれば、日本へ行ったことのない呉江出身の戴笠（耘野）の事跡を、日本で中華文化を伝播する独立（戴曼公）と同じ人物に扱うという誤りを指摘している。

また、筆者の「独立禅師と朱舜水—文化伝播者の異なる論述—」では、仏学、儒学思想をめぐる独立と朱舜水の異なる主張、独立、朱舜水及び安東省菴の詩作に関する異なる論述について試論した。¹⁴

3、独立の交友関係及びその学芸

独立は1653年（承応2年、58歳）から1672年（寛文12年、77歳）まで計21年間に亘り日本で居留した。水戸藩徳川光圀（1628-1700）の賓師朱舜水（1600-1682）の居留時間とほぼ重なっている。彼は最初長崎の興福寺、福濟寺に居住し、当時の日中仏教界の僧侶たちと交友しながら、長崎に滞在する中国文人や徳川初期の日本の知識人と深い関係を持っていた。

特に、独立は儒医として岩国藩主吉川広嘉（1663-1679）の招聘を受けたのち、その地で中華文化を伝播し、数多くの漢籍及び詩作文献を残していた。また、彼は黄檗宗万福寺開祖の隠元隆琦（1592-1673）が第四代將軍徳川家綱（1641-1680）謁見した際、書記として随行していた。なお、浙江紹興県出身的黄檗僧即非如一（1616-1671）の北九州小倉にて「福聚寺」の開堂に尽力したため、小倉藩主小笠原忠真（1596-1667）とも深い交友

関係をも持っていた。

こうした独立の学芸は仏、儒、医の諸分野にわたるばかりか、書法、篆刻、詩作などにもその才気は満ちあふれている。文化伝播者として、彼は京都の朱子学派の大家松永尺五（1592-1657）や幕府の御用絵師狩野安信（1613-1685）と詩文の交流によって、徳川社会に多数の文化遺産を残している。当時長崎や岩国における日本文化の形成にも深い影響をもたらしたといえる。

二、独立（戴曼公）人物考

1、独立の出自

徐秉元の『康熙桐郷縣志』（巻四）に独立の出自や学芸を、次のように記している。

戴笠字は曼公。杭州の人博學にして詩を能くし、兼ねて篆隸を工みにし、儒術を以て顯はるゝを欲せず、乃ち潜かに素問難經の諸書を究め、壺を濮里に懸く。崇禎中楚蜀擾亂す。公慨然として曰く、此れ君子の世を避くる時にあらずやと。蕃禺人に従ひ、桴に乗りて海に浮び、後終はる所を知らず。

また、日本側では、多数の文献が独立の事歴を記載している。まず、東条琴台の『先哲叢談続編』の「戴曼公伝」（巻一）には

今、諸書の云ふ所を案ずるに曼公明季に在りて、聲名著聞し、未だ耳順に至らざるに、鼎革の變に遭ふ。會々僧隱元東渡す、俄かに髪を薙いて之に従行す。其の擧たる、已むを得ざるに出づるも、實に釋教を信服する者にあらず。然らずんば即ち何んぞ能く諸家の書に收載すること此くの如きを得んや。

なお、江戸時代中期の儒学者・経世家太宰春台（1680-1747）はみづから独立の詩文集『天外老人

全集鈔』二巻を読み、独立の学芸才能について、次のように述べている。

余向得天外老人集鈔二巻。讀之始知其學術主於洛閩。文章經藝。固不讓朱舜水。¹⁵

即ち「独立の学術はいうまでもないが、文章の如きもかの朱舜水に優るとも劣らないものがある」と激賞し、春台が独立を朱舜水と比較して優劣をつけ難いと評するほどである。

なお、独立の弟子深見玄岱（高天滄、1649-1722）の「明獨立性易禪師碑銘併序」（埼玉県川越市金鳳山「平林寺」の木碑）によると、独立は明の杭州仁和県の人、その祖は晉の戴安道から出、長らく山陰の会稽山に住していたといい、彼の日本渡航の事情をも概述している。また、源良弼撰の『天外一閒人髮齒碑記』、独立自撰の『跋安南供役記事』、熊谷玄旦編『独立遺稿』、藤田葆編『独立遺藻』、『独立自筆書簡』、『独立墨蹟』などの文献にも記録されている。これらの史料は、独立禅師の事歴を知ることができると同時に、黄檗文化、宗教思想の風格、特色、さらに漢詩表現の形式の差異などの分析によって、独立をめぐる日中文化交流の相互影響そのものを解明できるものと思われる。

2、長崎への渡航

独立が朱舜水のために書いた「跋安南供役記事」には、

歲癸巳（1653）秋、易（獨立）與先生（朱舜水）天涯把臂、共寄足於穎川居士（陳入徳）之門。冬杪、先生遽以南服分行、翩翩振手、一瞬目間竟成八載。甲午（1654）冬、易自改觀安禪、為容客老。乙未（1655）秋、遊行神洛、飄然異國、野鶴孤蹤、不靳東西南北、齒黃髮白、緣難再親。¹⁶

とある。この跋文によると、独立が1653年（承応2年）の秋に初めて朱舜水と出会ったのは朱舜水の四回目の長崎渡航の時であった。当時、二人は1950年に日本に帰化した医者陳（穎川）入徳の私邸に寄宿していた。そして、1654冬、独立は隠元禅師に会い、日本で弘法するため、剃髪して黄檗宗に帰依し、その法号は「獨立性易」となった。独立は「天外一閒人」、「天外老人」の別称がある。

また、1669年（寛文九年）五月に岩国藩主吉川広嘉に送った独立の書簡に「放觀天外。及抵日本。突為鎮主甲斐庄公勉留。復為亡家之客」と書いている。¹⁷石村喜英によると、独立は1653年3月に長崎に着いた時、長崎奉行甲斐庄喜右衛門（橘正述、？-1660）は国禁をさしおいて書を送り、懇請して独立を長崎にとどめようと計ったので、ついに独立も「不帰の歌」をつくって帰国を断念したうえ、帰化した日本に永住の心を固めるに至ったという。なお、文中「亡家」とあるのは、いうまでもなく長崎酒屋町の中国杭州の帰化医頼川入徳（陳明徳）邸であり、渡航後おそらく間もない翌4月もしくはそれに近い頃、同家に寓居したものと見られるが、しかも同年秋には同じ長崎渡航の明人朱舜水とも、ここ頼川邸で寝食を共にして交情をつとに深め、12月舜水が再び安南に赴くまでの二、三ヶ月間を共に過ごしたと述べている。¹⁸

また、独立自身の手稿によると

我不堪忍受背負國恥已將屆七年、故與某越人商量乘其小船東渡、眺望茫茫大海並暗自思索、不覺間已抵達日本。後為長崎奉行甲斐庄喜衛門所置留、又身感旅人流離失所之悲痛。孤獨無依度過六十日。思年老無所恃、故遂為僧。

彼は、ベトナム人の商船で日本へ渡航したといい、旅人として路頭に迷う悲痛の中、寂しく六十日を過ごし、老齡で頼りががないため、僧になったという。独立の日本居留はやはり満清族が漢民族

の明を滅ぼした「国恥」が原因であった。そして、独立は1654（承應3）年春に潁川入徳で病を療養するため、長崎に赴いた柳川藩儒の安東省菴（1662-1701）に出会い、さらに朱舜水との交遊を得たのである。

三、独立と黄檗宗の関係

1、儒医から仏家の道へ

独立は、儒者や医者から禅師の道に帰属した理由はさまざまな論説がある。前掲『先哲叢談続編』に東条琴台は次のように述べている。

曼公勢不得已。雖入釋氏。忠憤義烈。足昭映於後世。而其高情逸想。播於聲詩者。不一而足。近時得西湖懷感三十韻。附載此云。

1657年8月、独立62歳の時「西湖懷感」三十韻（七言詩）を詠んだ。その末尾に、

虜に媚びて臣に居す。惨なり。戈を倒にして主を弑す。天を掃う風氣。命を絶つ衣冠。予が浪息東に徂くに至る。世外に寓庸し衣を更め俗を脱す。頂を摩し踵を放つ。兀兀たる團蒲。冥々たる結思。未だ一息の西湖を忘る能わざるのみ。（原漢文）

と述べている。彼は祖国明において味わった、思うにまかせない世の悲哀が、常に脳裡から離れなかった点に出家の動かし難い由因があり、その心情を極めて率直に吐露したものといえる。なお、吉川広嘉に送った独立の書簡にも「即自遠遁吳郷。無忍国之恥於方寸者七載」¹⁹と明滅亡後身を遠く吳郷に隠してすでに七載及んだいう。

安東省菴にとっては、満清族の粟を食わず、明日すら知れない運命に漂わされた外国「遺民」の独立に同情の心が湧き、次の七言絶六首を詠じている。

避亂江湖節操孤、一身對影更相呼、忠心變姓不降賊、休道緇流異我儒。²⁰

（乱を江湖に避けて節操孤なり、一身影に対して更に相呼ぶ、忠心姓を変えて賊に降らず、道を休めよ緇流我が儒に異なり）

独立が日本渡航を促す理由は乱を江湖（明清交替）に避けることに違いない。しかし彼は儒学を離れ、仏学に戻したとはいえ、儒学思想精神から全く無関連にすることではなく、むしろ独立の理想とするところは儒、仏両道の調和を身をもって実践しようとするににあったといえよう。この儒仏調和の主張は、独立の『碑銘』や『先哲叢談続編』の内容からも窺える。

2、独立と隠元禪師

独立と隠元の関係について、『碑銘序』には、下記の記載がある。

1654（承應3）年7月、普照國師隠元應日本邀請東渡、大振佛法權威。師（戴笠）悲痛六十歳亦餘命不久、心中誓言尋求解脫之道以度餘生、故伏請求為隠元國師弟子剃髮出家為僧。

すでに63歳になった隠元禪師は1654（承應3）年7月6日に多数の僧徒を率いて、長崎の興福寺に入り、即日開堂した。独立は同年12月8日に（五十九歳）隠元禪師の門に入り、長崎に薙髪して書記となり、出家の名を「独立性易」と改めた。仏教に帰依してから、一般に俗世間の事を乗り越えて、安易の気持ちを維持することができ、かつて意気軒昂とした個性とは大きく転換した。そして儒学や仏教を兼ねて学び、古典の書籍をも通読するようになった。この間、独立は陳入徳ら多くの帰化明人や朱舜水と交渉をもったことも推測できよう。

1655年8月、独立は長崎から出発し、師の隠

元一向と共に大阪に向かい、9月に攝津富田の普門寺に着いた。11月独立は狩野安信の来訪を受け、安信の画に題して七絶二十二首を賦詠した。1658年9月6日には、隠元が独立、竜溪に伴なわれて普門寺を発し僧徒一行とともに江戸に下る、湯島の妙心寺末天沢寺（いまの麟祥院）に投宿して後、同年11月1日登城して四代将軍家綱謁見し、将軍をはじめ幕府高級官人のただならない崇敬をうけるに至った。²¹その後、独立は隠元一行と別れて、江戸にとどまることとなった。この際、独立の活動について、『先哲叢談続編』には次のように記している。

萬治元年九月。隠元の江戸に朝参するに従う。是の時に當り貴紳高官の曼公を見る者。嘆慕せざるはなし。執政河越侯信綱松平伊豆守、参政臨江侯正次三浦志摩守り。皆請うて此に住せしめんと欲す。事沮みて果たさず、幾ばくも無くして崎に歸る。(原漢文)²²

特に老中松平信綱（伊豆守、1596-1662）は、独立の才徳を激賞し、格別の敬重を寄せて、招聘のうえ独立を川越にとどめようとしたことが窺える。

3、独立と即非の交友関係

万福寺の首座になった即非如一（1616-1671）は1664年（寛文4）年9月、豊前（北九州）小倉の藩主小笠原忠真の懇請により、小倉に広寿山福聚寺の開基に座す法契をとり結んだ。翌1665年（寛文5年）3月15日には晋山の法式を行うに際し、独立は招かれて長崎から北上、記録侍訳として同寺に寄住し、福聚寺の開堂結夏を援助した。小笠原忠真は、独立の精勤な日常に感じ、山中に静室を建てて、独立に与え、独立はこの静室に自ら額をかかげ「白雲室」と名づけた。『碑銘』に、

乙巳春。雪峰即非和尚。開山豊之廣壽東。師邀駕。虚半座以待。師輒翩然往。不憚餘喘出

力備至。豊主感師老而精勤。特就山中起静室。為憩息之所。自扁曰「白雲室」。

と記している。

なお、独立は福聚寺の開堂結夏中（1665年4月15日から7月15日）に朱舜水は水戸藩主徳川光圀に聘せられ、小倉を通る際、独立に面会を求めて書を送ったが、独立は結制中を理由に断わった。朱舜水は江戸に着いた後、次の書簡を独立に宛てた。

前夏路出豊前、相去山中咫尺、和尚不能親來面訣、反引結夏為辭、不能無憾。²³

と残念な意を表した。この頃、独立と朱舜水との関係はすでに誤解もあって悪化の途を辿っていたと考えられる。

四、岩国における独立と日中文化交流

1、吉川家との往来

独立は博学多才、単に儒学、文詩、書芸を能くしたばかりではなく、医術においても卓抜な技能を持ったことが窺える。独立の医術について、『先哲叢談続編』には

是より後居は地を擇ばざるも、其の縁に礙げらるる無し。文墨の外又方技に精なるを以て、活潑に業を施す。廢を起し痼を愈やすこと其の数を知らず。其の到る所神醫を以て治を請う者甚だ衆し。(原漢文)

と記している。

1664（寛文4）年2月には周防岩国の二代藩主吉川広正（1601-1666）が病のため、諸方に善医を探し求めていた折、独立の名医である風聞を耳にし、侍医の佐伯玄東を長崎に遣わして長崎奉行の了解を得る一方、長崎曹洞宗皓台寺の寺主月舟宗胡（1618-1696）の斡旋によって、独立招聘

のことが円滑に実現の運びとなるに至った。このため同年4月初め岩国よりの使者佐々木弥左衛門の案内で、独立は通事潁川（陳）独健を伴い、皓台寺の僧も加わって長崎を出発、4月に初めて岩国に着いた。この頃、独立はすでに七十歳の古稀を迎えた。岩国ではもっぱら藩主吉川広正、吉川広嘉（1621-1679）親子の診脈治療につとめ、およそ四ヶ月滞在の後、8月には独健等とともに岩国を発して、長崎へ帰っている。²⁴その後、独立は1665（寛文5）年、1667（寛文7）年、1668（寛文8）年にも一回ずつ岩国へ往診し、計四回の岩国滞在となった。

2、独立の書芸

近世初期に日本渡来した黄檗禅僧の書の中では、隠元、即非、木庵、心越、独湛、千呆、悦山、高泉の諸禅僧は、いずれも高雅な手腕を発揮している。とりわけ、独立の雄勁豪壯の書風は一般の注目を惹くところであろう。その篆、隸、草の三体に長じたうえ、変転自在な雅趣に富む独得の書をものした点で、近世日本の書道界に新風を吹き込んだといっても過言ではないように思われる。独立の書には禅僧の書というよりむしろ書家の書というにふさわしい、ひときわ傑出したものが見受けられると石村喜英が指摘している。²⁵

独立の能書のことは前掲朱禎の『桐郷縣志』には「兼工篆隸」と記してある。独立の書は唐代革新派の張旭と系統を同じくする顔真卿、懐素、五代の楊凝式、宋代の米元章、黄庭堅、元代の鮮伯機、明代の文徵明、祝希哲、董其昌等の書風と類型的なものであり、いわば二王の伝統を墨守する保守的傾向の書に対する革新を目ざしたものと思われる。もちろん革新系の中にあっても個々それぞれに独自の個性を創造案出したのはいうまでもないが、このうち独立の場合は際立って特殊性を身につけ、ことに懐素に学ぶところがすこぶる多かった。²⁶

独立の弟子深見玄岱の『碑銘序』の中に、

至如書法。正鋒逼古。神氣含光。獲其片紙隻字。珍襲猶如鍾王墨蹟。蓋亦絕品也。

と評しているほか、『先哲叢談続編』にも独立の書について、

正鋒にして古えに逼る。故に其の片紙隻字を獲る者。珍として之を重んず。文董の遺墨の猶く。畜に洪璧のみならず。（原漢文）²⁷

と絶賛している。

また、岩国の儒者字都宮遯庵は、独立は詩作を重んじると同時に草、篆、隸の書法は皆良くし、特に草書は最も絶妙である評価している。なお、『長崎と県人物伝』によれば、江戸時代前期の書家・陽明学者北島雪山（1636-1697）は、黄檗僧から文徵明の書法を学び、唐様の書風の基礎を築いたという。当時長崎にあった書家の北島雪山は、その頃豊前小倉の広寿山に即非の下で寺務を助けつつあった独立を訪ね、就いて筆法を学んだといわれるほど、独立の書名すでに相応に高かったことが窺える。『先哲叢談続編』ではこのことを単に「曼公以其法。傳之於北島雪山。及高天瀾」と記しているにすぎないが、その書法が北島雪山、深見玄岱（高天瀾）に伝えられて後、前文に続いて、「雪山傳之於細井廣澤。天瀾傳之男頤齋。頤齋傳之於澤田東江」とあるように、さらに前者は細井広沢に、後者は深見頤齋に、頤齋はまた沢田東江に伝えることとなって、黄檗禅僧とともに独立が江戸時代唐様の興隆に先鞭的役割を果たしている事実は、無視できない存在である。

3、独立の詩作

『桐郷縣志』や『佩文齋書譜』には、「博学にして詩を能くす」と見え、独立は杭州にあった時代に早くも詩賦に長じ、その文名を謳われていたことが明らかである。また日本渡来後に賦した現存

の遺作も少なくない、熊谷玄旦は早くから独立の詩作品を蒐集して『独立遺稿』(1705)として編輯した。藤田葆も1889年(明治22年)4月に『独立遺藻』を編輯している。²⁸

今関天彭氏『近代支那の学芸』のように、独立の遺作を見て「物足らぬ点が多い」とする人も存する程で、必ずしも独立の文詩に対する後人の批判は一致していない。²⁹このことについて、前述の深見玄岱が独立の『碑銘』を撰述しながら、文中で文詩のことに多く触れなかったことや、独立の逝去後、さらに、詩文を木下順庵(1621-1699)にも学んだと見做されることと、あるいは関連があるのであろうか。将軍綱吉(1646~1709)の侍講となった当代「文運の嚆矢」とも謳われた木下順庵が、

黄檗獨立禪師。題詩於松花堂。格律清健有中原之風度。³⁰

として独立の詩を賞揚している。ことに独立に親交であった安東省庵が、独立と文便を通じてしばしば賦詩の応答を行なっていることは『省庵先生遺集』によって知られる。³¹

岩国にて自分の学芸を存分に発揮した独立は、ついに地元の名人儒者の宇都宮遯庵と面識をもつことなく、文通のみにとどまったのであるが、遯庵は独立の諸学諸芸の中最も長じたものは詩賦であるとし、独立の文詩と詩藻を賞讃する文をのこしたのである。これは遯庵が独立の多数の文詩を披見した上での評辞であり、この評価までもまったく無価値なものとするのはできない。独立が文詩において決して抜群無双の逸人ではなかったとしても、水平線をはるかにうわまわる詩賦家であったことは、これらの評に照らしてもほぼ推測に難くないものがある。

五、結語

徳川初期の学問は朱子学を官学にし、儒学を社会の中心的な学問であったため、四書、五経などの経典は儒教の思想体系を創出した。一方、仏教世界は政権の中核から徐々に離れていく傾向が見られる。独立が日本居留の間は、あたかもこの儒教と仏教が激しく対立していた時期であった。彼が、このような封建社会で仏学、儒学、詩作、書道、医学など諸分野を兼ねながら、雑学性を持つ学問を日本社会に普及しようとする文化活動は難度が高いものと想像できよう。特に、近世の仏教界においては、経済面が「檀家制度」によって保護されたため、寺院の数は増えつつある一方、仏教徒は真面目に宗教活動を努めようとはしなかった。

しかし、この近世日本の仏教界が不振に陥ったため、外来の黄檗禅宗が日本の仏教の振興に絶好の機会を与えられた。独立は「三教は聖人の一体となり、同工の實際理地と為す」を説き、「三教平心論」の論点を賛同している。「術同道廣、治不視方。濟人及物、内外本行。應機臨變、儒釋活路、方技又然」という理念をもって、即ち「三教は聖人の一体となり、同工の實際理地と為す」を説きのように仏、道の推進を優先する傾向がみられ、日本の宗教社会に影響をもたらしたといえよう。

独立は書道、詩作の特長を持って、徳川社会の僧侶、儒者たちと交遊し、驚くほどの作品を日本側に残した。この莫大な文化遺産の大半は未だに解説されていない。筆者は、独立関係文献の蒐集、解説を続々と進み、『獨立禪師全集』の刊行に向けて、今全力投球をしているところである。

以上、述べたように、独立は儒家としてよりも、彼は仏教者、書家、詩賦家、医者として、日中文化交流の貢献に高く評価すべきであろう。

注釈

- 1 『獨立遺稿』写本、市立岩国徴古館蔵。
- 2 王韜『扶桑游記』、鍾叔河『走向世界叢書』、(湖南：岳麓書社、1985年)、頁418。
- 3 金關天彭「日本流寓の明末諸士」、『近代支那の学芸』(民友社、1931)、頁382-414。
- 4 辻善之助『日支文化の交流』(創元社、1938年)。
- 5 桂芳樹「長崎に渡来した独立禪師の岩国における資料」、『長崎談叢』44、45、46輯、1966年。
- 6 石村喜英『深見玄岱の研究』(東京：雄山閣、1973年)所収。
- 7 桂芳樹「僧獨立と吉川広嘉」、(山口：岩国徴古館、1974年)。
- 8 高井恭子「書道思想における道家思想の一端について—王羲之から黄檗僧獨立性易まで—」、『黄檗文華』124號(京都：黄檗文化研究所、2003年)。
- 9 高井恭子「黄檗僧獨立性易の經史批判の特色—唐朝における正史整備事業と仏教の関係—」、『東海仏教』46(東海印度學佛教學會、2001年)。
- 10 高井恭子「獨立性易の書と学問—明書風受容の背景—」、『黄檗文華』116號(京都：黄檗文化研究所、1996年)。
- 11 高井恭子「明末歸化中国僧の学識について」、『印度学仏教学研究』49-1(通號97)、(日本印度學佛教學會、2000年)。
- 12 高井恭子「獨立性易の六義解釈について—王羲之批判を論點として—」、『黄檗文華』通號118(京都：黄檗文化研究所、1998年)、頁131。
- 13 梁容若「明季兩戴笠事蹟考」、『中國文化東漸研究』(台北：中國文化出版事業委員會、1956年)。
- 14 拙稿「獨立禪師と朱舜水—文化傳播者の異なる論述—」、『東亞文化交流與經典詮釋』東亞文明研究叢書79、(台北：臺大出版中心、2008年)、頁113-155。
- 15 前掲『先哲叢談続編』。
- 16 独立「跋安南供役紀事」、朱謙之『朱舜水全集』(北京：中華書局、1981)、頁35。
- 17 吉川重嘉氏蔵「獨立書簡」。
- 18 石村喜英『深見玄岱の研究』、頁408。
- 19 吉川重嘉氏蔵「獨立書簡」。
- 20 『安東省菴遺集』卷11。
- 21 『普照國師年譜』下、万治元年の条。
- 22 前掲『先哲叢談續編』。
- 23 朱舜水「與釋獨立書」、『朱舜水集』卷四、(北京：中華書局、1981年)、頁57。
- 24 岩国藩庁の記録『音信帳』1664(寛文4)年2月22日の条。石村喜英『深見玄岱の研究』、頁417。
- 25 石村喜英『深見玄岱の研究』、頁455。
- 26 石村喜英『深見玄岱の研究』、頁453。
- 27 『先哲叢談続編』卷11、戴曼公の条。
- 28 『獨立遺稿』と『獨立遺藻』は、いずれも岩国徴古館に所蔵している。
- 29 石村喜英『深見玄岱の研究』、頁460。
- 30 木下寅亮編『錦里文集』卷二。
- 31 同注14を参照されたい。